

資料紹介

長沢鼎ゆかりの漆器について

—取得の経緯をめぐって—

森 孝晴¹⁾

1) 891-0197 鹿児島市坂之上 8-34-1 鹿児島国際大学

薩摩藩英国留生長沢鼎ゆかりの漆器 1 個が本学の長沢鼎展示室兼資料室に長沢由来の貴重な資料の一つとして展示されている。これは昨年9月に同展示室にお目見えしたものである。その展示に至った経緯について紹介する。

直接のきっかけは2018年の5月にさかのぼる。2017年に設立された鹿児島カリフォルニアワインクラブ（筆者は顧問の一人）の招待で、長沢の子孫でその財産などを管理する伊地知家の当主であるケン・イジチさんご夫妻が来鹿された。カリフォルニアで「ブドウ王」「ワイン王」として知られる長沢の名を冠したワインバーが城山ホテル鹿児島にできるということでそのオープニングセレモニーに出席するためであった。

筆者は、実はその4年ほど前にケンさんの叔母のエイミー・イジチ・モリさんと知り合いになり、時々メールのやり取りをしていたのだが、2018年の初めころに城山ホテルの依頼で彼女に来てもらうために連絡を取ったのだ。しかしエイミーさんは91歳のご高齢であるということで来鹿は難しいという返事が来るとともに、現在の当主であるケンさんを行かせたいとの意向が示された。

鹿児島カリフォルニアワインクラブと城山ホテルはこれを受け入れオープニングの準備に取り掛かった。筆者は主にケンさんとの連絡係として、また、来鹿された時にはケンさんご夫妻のお世話をするという仕事を仰せつかった。ケンさんご夫妻は5月の連休直前に無事来鹿され、大歓迎されて鹿児島市などに1週間滞在された。この間ご夫妻を長沢関連の史跡、つまり生誕の地や生育の地、そして墓所などにご案内したところ、お二人は大変感動し、喜んでくださった。

そしてご夫妻がアメリカに戻られた後、今度は夏にカリフォルニアを訪問する計画が持ち上がり、ワインクラブの

メンバーと鹿児島市の森市長が8月に訪問団を組織してアメリカへ向かった。ケンさんご夫妻も我々を歓迎するとのご意向だったので、筆者もそのメンバーの一人としてサンタローザ訪問やワイナリー見学に同行した。滞在中ケンさん宅に泊めていただいたのもとても光栄なことだったが、それ以上の感動が待っていたのだ。

我々は滞在最終日にサンフランシスコの南にあるリッジワイナリーを訪ねた。実はこのワイナリーには筆者がどうしても対面したいものがあったのだ。それは長沢が実際に育てたブドウの樹である。しかも大量にそれが残っており、その樹で今も高級ワイン（カベルネ・ソーヴィニヨン）が作られているのである。このワイナリー自体がカリフォルニアでトップクラスのレベルにある上に、このワイナリーでも最高級で一般の客には手に入らず会員にだけ頒布されるワインがこの長沢の樹から製造したワイン“Monte Bello Historic Vines”なのだ。この樹の具体的・歴史的由来についてはまた稿を改めて述べるが、筆者はぜひこの樹に対面し触れてみたいと念願していたわけなのだ。

さて、リッジワイナリーでこの樹に対面して感動していたのもつかの間、そこに現れたのがエイミーさんだった。彼女はお元気ではあるもののさすがに自由に動き回るといふわけにはいかなかったので、我々の滞在の最終日にいわばサプライズ的に我々に会うために、この長沢ゆかりのワイナリーに来てくださったのである。筆者はすぐにエイミーさんに近寄って行ったが、再会ではあったもののエイミーさんにハグしていただいても感動した。

ところが次の瞬間にさらに感動的なことが起こった。エイミーさんが小さな箱を持ち出し、こちらに差し出して、まずケンさん来鹿時にとても親切にいただいたと丁寧なお礼の言葉をかけてくださった。そのあとエイミーさ



長沢鼎ゆかりの漆器（本学7号館長沢鼎展示室で展示中）

んは「これは小さくてひびも入っているけれども、あなたにお礼として差し上げるには一番いいと思ったの。これは、何に使ったのかははっきりとはわからないのだけれど、ファウンテングローブ（長沢がサンタローザで住んでいたワイナリーの名前）で叔父（長沢）が使用していたものです」と説明してくれたのだ。あとは感動で言葉にならなかったのだから「ありがとう。ありがとう。最高の贈り物です」と返すのが精いっぱいであった。この箱の中には、小さいが歴史を感じさせる凝った模様の丸い筒状の漆器とふたが入っていた。

実はエイミーさんは、長沢の実の甥の娘さんである。生涯独身で通した長沢が実の孫娘のようにかわいがった人で、彼女の兄がケンさんの父幸介さんである。また、幸介さんの父が伊地知共喜氏で、長沢を慕って鹿児島からカリフォルニアにはるばるやって来て家族となった人なのだ。今やエイミーさんは、生前の長沢と実際に過ごした最後の人物なのである。その方が、この容器は長沢が使用していたものだというのだから間違いない。こうした生活の中で使っていたものが長沢関連で出てくることはあまりないので、貴重な一品である。

これを長沢がどこで手に入れたかはエイミーさんにもわからないそうだ。彼女が気づいたときには家にあったようである。長沢が薩摩から持ってきて大事にしてきたものなのか、あるいは4回の一時帰国時に買って帰ったりもらって帰ったりしたものか、はたまたジャパントウンあたりで手に入れたものか、は想像するしかない。しかしこの漆器の製作年代などがわかればそれもある程度推測できるかもしれない。はじめ我々はこれを茶筒だと予想したが、現在は他のものの可能性も出てきている。

この漆が塗られた器は、高さ6.4cm、口径5.8cmで、岩場から生えた草花や垣が蒔絵で描かれている。この漆器の由来や経緯を明らかにするために、漆工がご専門の川畑憲子氏（九州国立博物館文化財課）に写真を通じて鑑定を依頼した。写真鑑定のため暫定的な所見にとどまるが、漆器は江戸時代後期、19世紀ごろのもので、五十嵐派系統の蒔絵師による香炉、あるいは焚殻入の可能性があると所見をいただいている。

今後、さらに漆器の詳細を調査し、長沢入手の経緯や、長沢にとっての漆器の歴史的な意味について追究していきたい。